

## 第25番目の if = 「建国大学へ」(1)

それは確か、私が数え43才の年、斯道会の夏期研修会に、例年のように西、福島の両先生を講師として、お招きした時の出来ごとであったと思うが、私が先生のお宿……道頓堀の北詰めを一寸東へ入った北側の宿で、たしか河内屋と言ったかと思うが今はない……へ向かった処先生にはやや改まった調子で、「今日は少し話があるが……」と仰言って、「実は君に満洲国の建国大学へ行ってもらいたいのだが……」とのお話ゆえ、私としては生涯を国民教育のために捧げようとしたこととて、その旨を申し上げたところ、先生にはその後凝然として沈黙せられたまま、一言も仰言られず、かくして双方共に一言も発せず凝然たる沈黙にて、かくの如き永き沈黙の経験は、私としても生涯無かったのである。

今にして想えば、先生とても私の志望のほどは十二分にご存じであったが、当時の広島高師の内容は、その実現を妨げる重大因子があったのだが、先生としてはかかる学内事情には触れるべくもなく、かくして双方の沈黙、実に半時間近くにも及んだ故であった。かくて私としては、も早お受けする外なし……との絶対絶命感にて、ついにお受けすることにしたのである。すると初めて先生は「国民教育のために……と言っても、国外から見る必要もあり、また夏冬の休暇もあることなれば……」とは仰言れたが、学内事情については、つい一語も触れられなかった。

そしてその後しばてくして後、当時大阪南部の田辺の拙宅へ、作田荘一先生をお迎えしたが、先生は建国大学の副総長（総長は国務総理ゆえ、作田先生であった）。私はそれに先立つ七年ほど以前に、文部省の国民精神文化研修会の第一期生として、約半年上京して西先生を初め諸家の講義を聴き、その際初めて作田荘一先生の御講話を拝聴したが、聡明にして謙虚、柔軟にして強靱なるその思索に、全人格の反映が見られて、爾来深い敬意を抱いて来たのだが、今やその先生が親しく茅屋を訪れられて、就職へのお話とて、私としては恐縮してお受けしたのであった。

かくしてその年の歳末近く、第一回の入学生らとともに、伊勢に集合し神宮参拝後、一週間にわたりて禊ぎの修養をしたのであった。何しろ子供の頃以来大の寒がり屋であった私が、歳末五十鈴川に身を没しての禊ぎ修業であって、これまた生涯難忘の一事であった。かくして日時は忘れたが、そのまま一行は建国大学の所在地たる、旧満洲国の首都であった新京に向かったのであった。